

## 「屈原と楚辞」第二回

「離騷」「漁父」以外の「主要な詩」テキスト

2024-4-22 香取 (神漢 A012)

## 目次

## 1. 九歌（屈原）

きょうえん

神々との饗宴の歌である。天の唯一絶対神である「東皇太一」をはじめとして、天界・自然界の神々を祭るうたが集められている。

## ① 東皇太一

## 2. 天問（屈原）

天に対する問いかけである。天地創造のはじめから、神話の世界に語られるにしえの物語、そして人間世界の道理から地理歴史の知識に至るまで、あわせて一二の問いが発せられる。

## ① 第一段

## 3. 九辯（戦国楚の宋玉）

きゅうへん

宋玉が屈原の心になって、深くその意を哀れに思い、屈原の辞句を用いて、屈原のために作ったものである。九辯は楚辞の中でもすぐれた作品であると言われている。

## ① 九辯の第一段

## ② 九辯に影響を受けた後世の詩

## 4. 招魂（宋玉）

逃れ去る魂を招きよせる歌。体から抜け出した魂を招きよせる歌。体から抜け出した魂に向って、その行先が苦難に満ちていることをうたい、「帰っておいで」と呼びかける歌である。

## ① 招魂の第二段

## ② 招魂とは、招魂と蜚

## 九歌（屈原）

神々との饗宴の歌である。天の唯一絶対神である「東皇太一」をはじめとして、天上界・自然界の神々を祭るうたが集められている。

## 九歌

- (一) 東皇太一、(二) 雲中君、(三) 湘君、(四) 湘夫人、(五) 大司命、  
(六) 少司命 (七) 東君、(八) 河伯、(九) 山鬼、(十) 国殇、(十一) 礼魂

最初の「東皇太一」は、祭りの初めに当たって神を迎える迎神曲、最後の「礼魂」は祭りが終わって神を見送る送神曲、その間にならぶ九篇は、降臨した神に捧げられる歌舞劇だと考えられる。

## 東皇太一 東皇太一：最高神。

吉日兮辰良 穆將愉兮上皇 吉日の辰も良し。穆みて将に上皇を愉めんとす。

撫長劒兮玉珥 璆鏘鳴兮琳琅 長劒の玉珥を撫すれば、璆鏘と琳琅鳴る。

瑶席兮玉璫 盍將把兮瓊芳 瑶の席に玉の璫、瓊芳を盍せ将ち把り、

蕙肴蒸兮蘭藉 奠桂酒兮椒漿 蕙肴を蒸め蘭を藉き、桂酒と椒漿とを奠う。

揚枹兮拊鼓 疏緩節兮安歌 枹を揚げて鼓を拊ち、節を疏緩にして安かに歌う。

陳竽瑟兮浩倡 竽瑟を陳ねて浩倡す。

靈偃蹇兮姣服 芳菲菲兮滿堂 靈偃蹇として姣服し、芳菲菲として堂に満つ。

五音紛兮繁會 君欣欣兮樂康 五音紛として繁會すれば、君欣欣として樂康す。

## (解説・通釈)

よき日よき時を選んで、謹んで「上皇」、すなわち太一神をお迎えする準備が整えられる。まず長劒をかざしての劒舞が舞われる。

今日の良き日の時刻も良い。ここに敬んで上天の神を慰め奉ろう。

仕えまつる巫が長劒の玉の柄頭を握れば、ちりりと帯び玉が鳴る。

次に、神霊をお迎えする玉座と、奉げられる供物が歌われる。

美しい玉の席に、白玉の押石を置いてある。

玉のように美しい香りのよい花を合わせ取り持って献げ、蕙草の香氣高い肉を薦めて蘭をその下に敷き、桂酒（金木犀を漬け込んだ酒）、椒漿（山椒を混ぜ込んだスープ）を供える。

次に供されるのは音楽と舞蹈。

そこで、杓ばちを振り上げて鼓を打ち、拍子を緩やかにしてのどかに歌い、竽う吹きならし瑟しつを弾いて高らかに唱うたうと、しなやかに舞う巫女は美しく装い芳ばしい香りは立ちこめて広間に満ちる。

このように、剣の舞い、玉座のしつらえ、香り高い供物とおおがかりな音楽を背景に、神を降ろす巫女が、美しい衣装をなびかせて登場して舞う。

かくて、巫女の足に踏みしだかれた香草が、あたり一面を強い香りで満たし、オーケストラが壮大な音楽を奏する中に、「君」すなわち太一神は降臨したまい、よろこばしげにこの祭りを享受したまう。そんな祭りの一部始終がここには歌われている。五音入りまじって合奏すれば、神はよろこばしげにして安んじ樂しみ給う。

注）竽：竹製の管楽器。笙の大型のもので笙より一オクターブ低い。（コトバンク）  
 靈：巫女のこと。偃蹇：舞う姿の形容。しなやか。 姢服：みめよく装よそおう。

（新釈漢文大系「楚辞」七〇頁、「詩経・楚辞」一七六頁）

### （参考）

日本での神社の神事の進行は、一般的に次の順序で行われる。（ネット）

手水（てみず）

修祓（しゅばつ）：心身を祓い清めて、神に近づく（参列者全員）。

神饌（しんせん）の供え

宮司の祝詞（のりと）

玉串（たまぐし） 拝礼

巫女の舞（省略されることも多い）

神饌を撤し直会（なおらい）

（参考）輞川集

王維

（王維一〇〇選一三〇頁）

椒園

椒園

桂尊迎帝子

桂尊けいそんもて帝子ていしを迎え

杜若贈佳人

杜若とじゃくを佳人かじんに贈る

椒漿奠瑶席

椒漿しょうしょうを瑶席ようせきに奠てんし

欲下雲中君

雲中君うんちゆうくんを下ほつさんと欲す

### （訳）

匂いよき桂かつらの樽酒を用意して、湘夫人しょうふじんをお客に迎え、香しき杜若をとって佳き人に贈ろう。また香も高き椒漿しょうしょうを、玉の敷物にお供えして、雲の神を下界に下して、神々と交遊したい。

## 天問（屈原）

天に対する問いかけである。

三五四句から成り、楚辞中離騷に次ぐ長編。宇宙・人生に関する一七二の疑問を連ねて天に詰問した。懷疑文学の代表作。まず神話に伝える宇宙の混沌未分の状態に始まり、天地開闢かいびやくに及び、山川の経営から歴代帝王の政治を叙し、幾多の疑問を連ねたすえ、最後に楚国の史実を叙べて、その滅亡に対する自己の感慨と決意に終わる。

天問の題意についてはさまざまな説がある。その一つは、屈原は放たれて山野をさまよううち、楚の先王の廟に天地山川の森羅万象を描いた図を見て、それに詩を供えたとするもので、一種の画賛とする見方である。この詩は、楚辞のほかの詩と異なって、四言で一句をなしており、しかも今の字を用いない。これは画賛の手法に従った結果だと考えられる。

尚、本篇の問いについては、老荘「淮南子」その他の諸書に類型がみられる、とのこと。

全篇は十段に分かたれる。

第一段…天文に関する疑問

第二段…鯀・禹の治水伝説についての疑問

第三段…地上の怪異についての疑問

第四段…夏代の故事に関する疑問

第五段…仙人や神などの奇怪な説話に対する疑問

第六段…虞・夏・殷三代における婦人関係の説話を主とした疑問

第七段…殷の王朝及びその祖先の伝説に関する疑問

第八段…周代の故事を述べ、殷の紂王の事に及ぶ

第九段…周の祖先と文王・武王の故事を主として述べる

第十段…古代の雑事を述べる

ここでは最初の一段を紹介する。尚、「淮南子」天文訓及び精神訓に類似の話がある。

日遂古之初 誰傳道之 日く遂古すいこの初めは 誰かこれを傳道でんどうせる

上下未形 何由考之 上下未だ形あらず 何に由りてか之を考ふる

そもそも天地の初めのことは、誰が言い伝えたのだろうか。天と地がまだ形もないときに、何によってそれを考えたのだろうか

冥昭盲暗 誰能極之

冥昭盲暗なる 誰か能く之を極むる

馮翼惟像 何以識之

馮翼として惟だ像のみあり 何を以てか之を識れる

昼夜もまだ分かれず混沌として暗かったときに、誰がそうした状況を見極めたのだろうか。気が盛んに浮動して形象もなかった時に、どうしてそうした姿を識別したのか。

以上の二章は、宇宙の混沌未分の状態についての疑問。

明明暗暗 惟時何為

明を明とし暗を暗とす 惟れ時れ何をか為せる

陰陽三合 何本何化

陰陽三合す 何れか本にして何れか化なる

合して万物が生じたとき、どれが本でどれが変化だったのだろうか。この章は、天地開闢の際における造化の働きに対する疑問。本件は宋代の儒者にとっても大きな課題で、朱子他が哲学的思索を記している。

圓則九重 孰營度之

圓則は九重なると 孰れか之を營度せる

惟茲何功 孰初作之

惟れ茲れ何の功ぞ 孰れか初めて之を作れる

天は丸く九重の形をなしているというが、誰がこれを設計してつくったのか。是は誰のした仕事なのか。誰がはじめて作ったのか。

幹維焉系 天極焉加

幹維焉くにか系る 天極焉くにか加はる

八柱何當 東南何虧

八柱は何くにか當る 東南は何ぞ虧けたる

天の回転のための軸や綱はどこにつながれ、天柱はどこに立てられているのだろうか、八柱はどちらの方角に立っているのか、そこに東南が欠けているのはなぜだろうか。

九天之際 安放安屬

九天の際は 安くにか放り安くにか屬く

隅限多有 誰知其數

隅限多く有り 誰か其の數を知れる

九天の境界は、どこまで続いているのだろうか。その隅々は多くあるというが、だれがその数を知っているのだろうか。

天何所沓 十二焉分

天何れの所か沓なる 十二焉くにか分かてる

日月安屬 列星安陳

日月安くにか屬き 列星安くにか陳なる

天はどこで地と合わさっているのだろうか、十二の星次はどこで分かれているのだろうか。日月はどこに繋がれているのか、星星はいかなる配置になっているのか。

以上四章は天空に関する疑問。

出於湯谷 次於蒙汜

湯谷より出でて 蒙汜に次る

自明及晦 所行幾里

明より晦に及ぶまで 行く所幾里ぞ

太陽は朝東方の湯谷を出て、暮に西方の蒙汜に沈むというが、朝から暮の間に、どれくらいの距離を行くのだろうか。

この章は太陽の運行に関する疑問。

夜光何德 死則又育

夜光何の徳ぞ 死すれば則ち又育す

厥利維何 而顧菟在腹

厥の利維れ何ぞ 而して顧菟腹に在り

夜光(月)には何の徳があつて、欠けた(死)と思つたらまた満ちてくる(育)のか。何の利があつて、腹にウサギを住まわせているのか。

この章は月についての疑問。

女岐無合 夫焉取九子

女岐は合ふこと無し 夫れ焉ぞ九子を取れる

伯強何處 惠氣安在

伯強は何れの處ぞ 惠氣安くにか在る

女岐(神女)は夫と男女の交わりもしないのに、なぜ九子を産んだのであろうか、伯強(疫病神)はどこににいるのか、和氣はどこにあるのか。

この章は、前後と関係がない。恐らく錯簡であろう。

何闔而晦 何開而明

何くにか闔じて晦く 何くにか開きて明るき

角宿未旦 曜靈安藏

角宿未だ旦けざるとき 曜靈は安くにか藏るる

天のどこの戸を閉じると暗くなり、どこの戸を開くと明るくなるのか、東方がまだ明けない時、太陽はどこに隠れているのだろうか。

(漢詩と中国文化(ネット)、「楚辞」集英社一〇七頁)

九辯  
きゅう べん

(戦国楚の宋玉作)

宋玉が屈原の心になって、深くその意を哀れに思い、屈原の辞句を用いて、屈原のために作ったものである。九辯は楚辞の中でもすぐれた作品であると言われている。第一段から第九段までであるが、以下にその第一段を示す。

## 第一段

秋の寂しい季節感から触発されて、旅人、つまり屈原の心境を想像して述べた導入部。

## 第二段〜九段

追放された時のことを思い出し、屈原になり代わって悲しみ、旅のようすを描写しつつ、王に理解されなかったこと、価値観が世の中に合わなかったことを嘆いて絶望してしまふ。さらに王の側そばにいるよこしまな臣下たちを批判する。そして最後はどうとう引退を決意して、新たな旅に出るところで終わる。

要するに、全体としては屈原の「離騷」をリライトした内容になる。最後の旅には風の神、不思議な鳥など子供がたくさんいて、いかにも「楚辞」らしいが、じつは「九弁」ではそういった「離騷」的な部分よりも、この第一段の方が後世への影響が大きい。

最初の四句が導入。冒頭の二行で秋の本質をずばりと言いつつ切った感。

(「漢詩を読む①」 七六頁)

## 第一段

悲哉秋之為氣也

悲しいかな 秋の気たるや

蕭瑟兮 草木搖落而變衰

蕭瑟しょうしつとして 草木そうもく揺落して変衰す

僚慄兮 若在遠行

僚慄りょうりつとして 遠行に在るが若く

登山臨水兮 送將歸

山に登り水に臨みて 將まさに帰らんとするを送る

沅寥兮 天高而氣清

沅寥けつりようとして 天高く気清し

寂寥兮 收潦而水清

寂寥せきりようとして 潦を収めて水清し

憊悽増歎兮 薄寒之中人

憊悽さんせいとして歎なげきを増ね 薄寒の人に中あたるごとく

愴怳懷恨兮 去故而就新

愴怳懷恨そうほうわいこんとして 故こを去りて新に就く

坎廩兮 貧士失職而志不平

坎廩かんりんとして 貧士職を失いて志平たいらならず

廓落兮 羈旅而無友生

廓落かくらくとして 羈旅きりょにありて友生ゆうせい無し

惆悵兮 而私自憐

惆悵ちゆうたうとして 私ひそかに自ら憐れむ

燕翩翩其辭歸兮 蟬寂漠而無聲

燕は翩翩としてそれ辞し歸り 蟬は寂漠と

鴈靡靡而南遊兮 鵲雞啁晰而悲鳴

して声無し  
鴈は靡靡として南に遊ぎ 鵲雞は啁晰と  
悲鳴す

獨申旦而不寐兮 哀蟋蟀之宵徵

独り旦に申りて寝ねられず 蟋蟀の宵征  
くを哀しむ

時亹亹而過中兮 蹇淹留而無成

時亹亹として中を過ぐ 蹇として淹留し成  
る無し

### (語釈)

- 潦：秋の水 ● 坎廩：うらぶれる ● 廓落：ひっそり ● 鵲雞：鳥の名 とうまる
- 啁晰：声高く鳴く ● 蟋蟀：こおろぎ。 ● 蕭瑟：秋の風のふくさま。ものさびしいさま。 ● 僚慄：心が悲しみ痛む ● 沆寥：むなしく晴れて雲のないさま ● 寂寥：虚静の意 ● 慄慄：悲痛の貌 ● 愴怳：心が悲しみのためにぼんやりする
- 憤恨：心がむなしく愁える ● 羈旅：旅路 ● 惆悵：心うれえてぼんやりとなる
- 靡靡：雁の和して鳴く声 ● 亹亹：時の過ぎゆく形容 ● 淹留：久しく留まる

〔注〕この第一段は独特の風調を示すもので、のちの楚辞文学の展開に一つの方  
向を与えるものであった。

### (訳)

悲しいことよ、秋の気というものは！ 風はさわさわと草木に吹きさびしく鳴っている。それにより、草木は葉を落とし、吹き散り、色を変わっておとろえる。

逝く秋には心がいたみ悲しむもので、それは遠い旅路で、山に登ったり、水辺に立ったりして、故郷に帰ろうとする人を送る時の気分のようなのである。

秋の眺めはむなしく雲もない。大空は高くなり、空気は清々しいものとなる。

秋の野はひっそりとしてくるし、物影もなくなるのだ。長雨で出来た道の溜り水も収まり引いて、秋の水は澄んでくるのだ。

心は痛み悲しんで、次第にすすり泣くのである、はだ寒い秋の気は次第に人の身にしみる寒さになるのである。そうして、物悲しくうつろな心になり、気力もうちしおれ、住みなれた土地を去って見知らぬ国に行くことになるのである。

そのような境遇であれば心は楽しいものではなく、貧しい士大夫、その人は心中おだやかであるはずもない。ただ広々として寂しいのはその地も、心もそうなのだ。その地を離れてこの旅の空に友達もいないのである。

心はいたみ悲しみ、そしてひそかに自分を憐れに思うことであろう。

（悲愁の候、貧士失燭、自ら憐れむとは、宋玉が屈原に代わってその心中を述べる。）

燕はひらりと飛んで別れを告げて去り、蟬はもう静かに影もなく声が聞こえない。雁は鳴きつれて南へ旅をし、鷦鷯はいやな声で悲しく鳴いている。

私は夜あけまで眠られず、こおろぎの夜どおし鳴くのを哀しむ。時は過ぎ易く、すでに今年も盛りを過ぎたのに、ああ久しくなっても何一つでき上がらない。

（紀頌之の漢詩ブログ、2134、新釈漢文大系「楚辞」二八二頁、「中国の古代文学―神話から楚辞へ」四〇七頁）

（詩語）秋の情景・思いの詩語の宝庫である。

蕭瑟、草木搖落、登山臨水↓登臨、天高而氣清、寂寥、廓落、羈旅、惆悵、翩翩、寂漠、鴈、啁晰、蟋蟀、等々。

注1)

「楚辞」以前の中国には、秋を「悲しい季節」として表現した作品がない。

「詩経」にもけっこう秋は詠われているが、穫り入れ、収穫の季節として表現されている。（「漢詩を読む①」七七頁）

注2)

宋玉の師にあたる屈原は寂しい秋を詠いますが、明確に秋は悲しいとはいいません。秋は悲しいというのは、宋玉から始まります。そして「悲秋」の文学が連綿と続くことになります。

（鷺野正明「漢詩の美しい言葉」一七八頁）

## 九辯に影響を受けた後世の詩

## 『秋風辞』 武帝

『秋風辞』は前漢の絶頂期をつくった武帝四四歳の詩です。河東汾陰（現山西省）で土地神を祭った帰り、治世も早三〇年近く、漢王朝絶頂期でありながら秋風にふと感じた寂しさ、老いの予感が詠われています。

秋風起兮白雲飛

秋風起こりて 白雲飛ぶ

草木黄落兮雁南帰

草木黄落して 雁 南に帰る

蘭有秀兮菊有芳

蘭に秀有り 菊に芳有り

懷佳人兮不能忘

佳人を懷いて 忘るる能わず

泛楼船兮济汾河

楼船を泛べて 汾河を济り

横中流兮揚素波

中流に横わりて 素波を揚ぐ

簫鼓鳴兮発棹歌

簫鼓鳴りて 棹歌を発す

歡樂極兮哀情多

歡樂極まりて 哀情多し

少壮幾時兮奈老何

少壮幾時ぞ 老いを奈何せん

## (訳)

秋風が吹き白い雲が飛んでいく

草木は黄ばんで散り、雁は南に帰る

蘭は美しい花を咲かせ、菊には芳香がある

出会ってきた佳人の面影は消えることがない

屋形船を浮かべて汾河を渡ろうと

流れの中ほどに船を横たえれば白波が立つ

船の中では笛や太鼓の音、舟歌の声

楽しみが極まれば哀しみが胸に迫る

若く元気な日々はあとどのくらいか、やがて来る老いをどうしたらいいものか

## (解説)

表題：「辞」は韻文の一種。

第1句：「兮」は調子を整える言葉で、中国語では「シー」と読みますが、漢

文では読みません。『楚辞』や楚調（『楚辞』の影響を受けた調べ）

の歌に多く用いられる。

第2句：「黄落」は木の葉が黄ばんで落ちること。

第3句：「秀」は「花」。

第4句…「佳人」は朝廷の美女説、賢臣説、土地を守る女神説などがあります。

現代語訳では美女説を採りました。美しい花や宮廷の美女たちはまさに人生の歓楽を象徴するものでしょう。

第5句…「楼船」は「二階建て仕様の船」。「泛」は「浮かぶ」。「汾河」は山西省を流れている川の名前です。「济」は「渡る」。

第6句…「素波」は「白波」。

第7句…「簫鼓」は「縦笛と太鼓」。「棹歌」は「舟歌」。

第8句…「哀情」は「哀しみ」。

第9句…「少壮」は「若く血気盛んな年ごろ」。「幾時」は「いつまで続くことか」「奈く何」は「くをどうしたらいいのだろう」。

武帝の詩はもの寂しげな秋の情景で始まります。

やがて美しい蘭の花や菊の香り、宮廷の美女たちの面影。

さらに汾河を渡る豪勢な屋台船とそこで奏でられる簫や太鼓の音、舟歌の朗々たる声。土地神への祈りの行事が終わって、ホッとした帝王や臣下たちの宴会の音がにぎやかです。

お酒も入っておおいに笑い楽しんだその時、ふと哀しみがこみあげてきます。歓楽の時も必ず終わる、我が命も必ず終わりを迎える。

充実した気力で国を動かせるのもあとどのくらいだろう。老いを迎えたらどうしたらいいものか。

武帝は一六歳で即位し六九歳で亡くなっていますから、四四歳といえましょう。その治世の真ん中。活力もまだ充分みなぎっていた頃です。大帝国の権力を一手に握り、衛青や霍去病<sup>かくきよへい</sup>など自分が抜擢した天才將軍の活躍で、不俱戴天の敵・匈奴との戦いでは連戦連勝。張騫<sup>ちやうけん</sup>の活躍で西域との交流も始まり、領土は増え、順風満帆です。そのさなかに書かれ、まさに「歓楽極まって哀情多し」、歓楽の極みに不幸な晩年の予感がよぎったような詩です。

この頃から武帝は神仙思想に取りつかれていきます。始皇帝と同じく絶大な権力を握った人物は、不老長寿を夢見てこの世もあの世も支配したいと思うのでしょうか。老いへの不安がそれを一層かき立てたのかもしれない。

ともあれこの詩の最後の二句は、ある年齢以上になると人は誰しも多かれ少なかれ抱く感慨でしょう。

それだけにあの大皇帝にしてもそうなのかと、人の胸打つ詩文として後世に残ったのかもしれない。

### （形式・技法）

この詩は全部で9句からできていて、漢詩といえば五言絶句や七言律詩が浮かぶ私たちにとっては9句というのはどういう詩型なんだろうといぶかしく感じます。実は漢詩の典型的な形式が出来上がったのは唐代に入ってからで、武帝の時代から七〇〇年も後のことです。つまりこの詩は、絶句や律詩、五言や七言という私たちにおなじみの型がまだなかった時代に作られた韻文です。

詩句の間に「兮けい」という合いの手が入っていますが、これは中国語では「シー」と読み、戦国時代の楚の民謡の特徴です。楚の歌といえば屈原や『楚辞』が浮かびますが、『楚辞』の中の屈原や宋玉の詩にもこの「兮」が出てきます。

漢代になぜ楚の歌謡の特徴が？と疑問に思うところですが、戦国～大大国・秦と楚のうち、楚が秦に敗れ始皇帝の王朝が成立します。その後始皇帝が急死すると秦王朝はたちまち崩壊。項羽軍との一騎打ちを経て劉邦の漢が建ちます。劉邦も項羽も、さらには劉邦に付き従った大勢の武将も皆旧楚の人々でした。秦を倒したのは実は滅ぼされた楚の遺民だったのです。

つまり漢王朝初期の中心メンバーはみな楚出身で、彼らが詠う詩はどれも楚歌の特徴を持っていました。劉邦が建国後故郷に凱旋した時の詩、その前劉邦軍に包囲された時の項羽の『垓下の歌』、みなこの「兮」という楚民謡の合いの手が入っています。

この傾向は劉邦（～BC.195）のひ孫で、前漢王朝第7代皇帝である武帝（BC.156～BC.87）の時代まで続いていたのでした。

また武帝のこの詩は、『楚辞』の中の宋玉の詩『九弁』の最初の二行の影響が色濃く見えるともいわれています。『九弁』は「悲しいかな、秋の氣為るや。蕭瑟として、草木揺落して変衰す」という二行から始まります。「秋は悲しい」という日本の和歌にもある情緒が詠われているのです。

秋は本来収穫の季節、皆で歌い踊り豊作を喜び合う季節です。ところが平安以降の日本の和歌では「秋はもの悲しい」という歌がたくさん詠われています。実はこれ、『文選』（古代中国の名文のアンソロジー・詞華集）を通して伝わったこの宋玉の詩の影響だといわれています。そうすると「秋はもの悲しい」は宋玉の詩が伝わった奈良・平安以降の日本の情緒ではあっても、それ以前からの日

本固有の情緒ではなかったのですね。

注）平安以前の文学作品といえば「万葉集」ですが、これに収められた秋の歌の中に、秋を悲しいものとして詠んだ例はありません。（「漢詩を読む」① 七七頁）

けれども平安以降「秋はもの悲しい」は日本人の情緒として定着していきました。収穫の秋ではあっても、太陽の力も植物の生命力も次第に衰え、秋は確かにもの悲しい：日本人の腑に落ちる感覚だったのでしょう。

ところで「秋はもの悲しい」は万国共通の感情かと思っていましたが、イギリスの作家エミリ・ブロンテの『嵐が丘』後書きに「秋の木葉が散っていく喜び」が詠われた詩が紹介されていて、それを読んだ時びっくりした記憶があります。当時中学生でしたが、木の葉が散っていくのを見るのはもの悲しいことだと思っていましたから。二千数百年前に生きた宋玉の影響力畏るべしです。

## 武帝<sup>ぶい</sup> (BC.156～BC.87)

武帝は前漢王朝第7代皇帝で BC.140 年一六歳の時に即位し、前漢の黄金時代を築きました。国内では政治経済改革を進め、対外的にはそれまでじつと我慢していた匈奴の横暴に対し、愛妃（後の衛皇后）の親族であった衛青、霍去病<sup>かくきよへい</sup>を抜擢し連戦連勝の快挙を成し遂げました。西域に対しても積極策を打ち出し、国土を広げました。晩年は神秘思想に傾き、若い頃の英明さを失って、李陵將軍を匈奴に追いやったり、李陵をかばった司馬遷にむごい刑罰を与えたりしました。詩や賦にもたけ、7首の詩が残っており、『秋風辞』はその一つです。

（ネット、中国語スクリプト） （漢詩鑑賞辞典 二六頁に採録）

## 詠懷古跡五首 其二 杜甫

## 戦国楚の文人宋玉（BC.298～BC.222）の旧宅を詠う

揺落深知宋玉悲

揺落 深く知る宋玉の悲しみ

風流儒雅亦吾師

風流 儒雅 亦吾が師なり

悵望千秋一灑淚

千秋を悵望して一たび涙を灑ぎ

蕭條異代不同時

蕭條として代を異にし時を同じうせず

江山故宅空文藻

江山の故宅 空しく文藻あり

雲雨荒臺豈夢思

雲雨の荒台 豈に夢思ならんや

最是楚宮俱泯滅

最も是れ楚宮 俱に泯滅す

舟人指點到今疑

舟人指點して今に到りて疑う

## （語釈）

●揺落：揺れ動いて落ちる 風に木の葉が揺落する ●儒雅：儒教における道理。

●悵望：心をいためて思いやる ●蕭條：ひっそりとして物寂しい ●異代：宋玉と自分は時代をともにしていない。

●雲雨荒台： 楚の懷王が夢に神女に会った話がある。

宋玉の『高唐賦』に「昔者先王嘗遊高唐怠而晝寢夢見一婦人曰…妾巫山之女也爲高唐之客 聞君遊高唐願薦枕席 王因幸之 去而辭曰…妾在巫山之陽高丘之阻旦爲朝雲暮爲行雨 朝朝暮暮陽臺之下」とある。

●泯滅：滅んでなくなる

## （大意）

秋風揺落の風情に宋玉の悲しみが身に沁みる。かの風流を愛し儒道に則る進退もまたわが師表である。彼我を隔てる一千年。その懸隔に涙をそそぎ、時代をとものにできなかった寂莫を噛みしめる——彼だったら今をどう生きただろうかと。江山の旧宅はすでに失せ、残ったものは文藻（詩賦）のみ。「高唐賦」での雲雨荒台は夢だったと言うべきか。されど、宋玉のみならず、楚王の宮殿も楚の国さえもなくなった。ここが宮跡だと指さす舟人も、かつて本当にあったのかを疑っているかのようだ。

宋玉は、戦国時代、楚の詩人。秋を絶唱した「九弁」の他に、楚の王が巫山の神女と夢で逢ったことを詠じた「高唐賦」などがある。雲雨荒台はその「高唐賦」に、楚の王が高唐に遊び、昼寝の中で巫山の神女と会い、神女が去りぎわに、私は朝に雲に、暮れには雨になりますと言った話。

（杜甫の昭君と詠懷古跡五首（ネット）、杜甫一〇〇選 二七三頁）

## 寄劉蘇州

劉蘇州に寄す

白樂天

去年八月哭微之

去年八月 微之を哭し

今年八月哭敦詩

今年八月 敦詩を哭す

何堪老淚交流日

何ぞ堪えん 老淚 交流の日

多是秋風搖落時

多くは是れ 秋風 搖落の時なるを

泣罷幾回深自念

泣罷んで 幾回か 深く自ら念い

情來一倍苦相思

情来りて 一倍 苦に相い思う

同年同病同心事

同年 同病 同心事

除卻蘇州更是誰

蘇州を 除却すれば 更に是れ誰ぞ

## (語釈)

●劉蘇州：劉禹錫は蘇州の長官であった。 ●哭：大声で泣いて悲しむ。 ●微

之：元稹。 ●敦詩：崔群。 ●交流：こもこもながる。 ●搖落：ゆれおちる。

●苦：ねんごろ。 苦しい。 はなはだしく。 ●相思：あいおもう。 ①お互いに思

う ②あなたを思う。 ②が一般的。 ●同心事：同じ心もち。 ●除卻：卻は助字、

無意味。

## (訳)

昨年げんじんの八月は元稹げんじんの死を哭し、今年の八月には崔羣さいぐんの死を哭した。老いの涙  
 がこもこも流れる日が、いつも秋風が吹き、木の葉が散る時期とは、なんとも  
 堪えきれない。泣きやんで何度も深く自分のことを思い、情がわいてしきりに  
 君のことが思われる。年も同じ、病も同じ、考え方も同じ、という人は、君、  
 劉禹錫をのぞいては誰もいない。

## (鑑賞)

太和六年（八三二年）、白居易六一歳、親友がつぎつぎに他界することを悲  
 しんだ。

去年八月哭微之、今年八月哭敦詩、同年同病同心事、など、白居易には、同  
 一句の中に 同一の繰り返し返しの用法がよくある。平仄規則の無視も見られる。

（寄劉蘇州 唐 白居易 漢詩を楽しむ（ネット）、白樂天一〇〇選 二八八頁）

## 暮立

暮に立つ 白楽天

黄昏獨立佛堂前  
滿地槐花滿樹蟬  
大抵四時心總苦  
就中腸斷是秋天

黄昏 独り立つ仏堂の前  
地に満つる槐花 樹に満つる蟬  
大抵 四時 心総べて苦しけれど  
就中 腸の断たれるは 是れ秋天

(白楽天一〇〇選 一五七頁)

(秋の哀しさでなく、秋のすばらしさを詠った詩)

## 秋思

劉禹錫

自古逢秋悲寂寥  
我言秋日勝春朝  
晴空一鶴排雲上  
便引詩情到碧霄

古自り秋に逢うて 寂寥を悲しむ  
我は言う 秋日 春朝に勝ると  
晴空一鶴 雲を排して上る  
便ち 詩情を引いて 碧霄に到る

(白楽天一〇〇選 二九一頁)

## (大意)

昔から人は秋になると、もの寂しく悲しい思いをするが、自分は秋の日の方が春の朝にも勝っていると言いたい。

晴れわたった秋空高く一羽の鶴が、雲を押し分けるようにして舞い上がって行く。それは人の歌心を誘うようで、共に大空の上まで昇りつめるようである。

## (語釈)

●寂寥：物静かでさみしい。 ●秋日：ここでは春朝に対して秋の日差しの輝く時。 ●便：それは。 ●碧霄：碧空。 あおぞら。「霄」は天空。

## (鑑賞)

悲運の作者に差し込んだ希望の光

確かに多くの詩人は、秋といえば物静かでさびしい情を詠んでいる。承句の「春朝」には孟浩然の「春暁」が想定されるが、「秋日」を際立たせる伏線である。後半2句は無条件に明るい。一羽の鶴が真っ青な天空に舞い上がり、作者もその光景に誘われて詩情が湧くという明朗さは、なかなか他の詩にみられない。もっとも鶴が群れを離れて一羽のみ上空に舞い上がるということは現実にはありえないから、作者の空想であろうと思えるが、その詮索は今置いておく。もしかすると長い地方役人から解放されて都に帰還を許された折の詩かもしれない。希望が満ち溢れている。

しかし劉禹錫のもっとも有名な詩は「秋風の引」で、やはり秋の感慨を詠じている。同じ作者の趣向が違っていてなんら不思議はないが、読み比べてみると一層鑑賞が深まる。

## 秋風引

秋風の引 劉禹錫

何処秋風至

何れの処よりか 秋風至り

蕭蕭送雁群

蕭蕭として 雁群を送る

朝来入庭樹

朝来 庭樹に入り

孤客最先聞

孤客 最も先に聞く

## (訳)

どこから吹いてくるのか、秋風が訪れて、雁の群れを寂しく南の方へ吹き送っている。今朝方から庭の植え込みに吹き込んで、梢をさらさら鳴らしているが、真つ先にそれを聞きつけて、ひしひしと秋をかみしめている者は、孤独な旅人であるこの自分である。

この詩は彼の代表作である。「秋思」に比べれば明と暗の違いがあり、かなり湿っぽい。地方に左遷された期間が十年以上になることもあったので、故郷への思いは募ったであろう。結句がことに有名である。誰よりも秋風の訪れを真つ先に知ったということは、誰よりも先に秋の寂寥感を感じ、望郷の念に沈んでいるということになる。秀才の作者にも訪れた悲運の日々を思うとき、この詩は普遍性と説得力がある。

二題の詩を通して、波乱の生涯を送った人間劉禹錫が理解できるのではなからうか。

(ネット情報)

## 錦繡

① 錦にしきと、刺繡ししゅうをした織物。美しい織物。

② 日本… 木々が紅葉して、錦にしきの織物のように美しい秋の表現に用いられる。  
(日本人の秋に対する感性によるものと思われる)

③ 中国… 搜韻での用例二三四〇首。後藤先生が言われたように春の詩が多い。  
例えば、「錦繡」が用いられている「西省対花、憶忠州東坡新花樹、因寄題東樓」(白樂天、白氏文集卷一九)は春の詩。

## 西省對花憶忠州東坡新花樹因寄題東樓

白樂天

西省にて花に對し、忠州東坡の新花樹を憶い、因つて東樓に寄題す

每看闕下丹青樹 毎に闕下丹青の樹を看て

不忘天邊錦繡林 天邊錦繡の林を忘れず

西掖垣中今日眼 西掖の垣中 今日的眼

南賓樓上去年心 南賓の樓上 去年の心

花含春意無分別 花は春意を含んで 分別無く

物感人情有淺深 物は人情を感じしめて 淺深有り

最憶東坡紅爛熳 最も憶う 東坡 紅爛熳

野桃山杏水林檎 野桃 山杏 水林檎

## (語釈)

●西省、西掖：中書省。宮中の西にある。

●天邊：天のはて。忠州を指す。

●南賓：忠州の古名。 ●春意：春の風情。 ●水林檎：リンゴの一種。

## (訳)

いつものことながら宮中の紅緑とりどりの花樹を眺めていると、天の果て忠州の錦繡のようにきらびやかな花樹の林を思い出す。今日、私はこうして中書省の垣牆の中で花を眺めているが、昨年は忠州の樓上にあつて愁いに沈んでいたものだ。花は忠州も宮中も区別無く春の風情をつつんでいるが、その花によって触発される人の心情は深淺さまざまである。とりわけ思い出されるのは、忠州の東坡に私が植えた花樹の林。今ごろは野桃や山杏、それに水林檎の紅い花が爛漫と咲き誇っているころであろう。

**招魂**

「楚辞」の「招魂」篇。どこかに行ってしまった屈原の魂を巫祝（シャーマン）が呼び戻す、という設定で、屈原の弟子の宋玉が作った。

「招魂」篇は第一段から第十段までである。

第二段～三段では、「魂兮归来（魂よ帰り来れ）」という招魂の一句が繰り返される。そして、魂の逃れ去ろうとする四方、すなわち東西南北と、天上地下の各方向が、それぞれに辛く居心地の悪い場所であることを言い、反対に戻るべきこの世界が、極めて居心地の良い世界であることを歌う。

例えば、東方には十個の太陽が代わる代わる出てきて、全てのものを溶かしてしまう、南方には入れ墨をした野蛮人が人の肉を喰らう、西方には砂漠が広がり水もなく、北方は氷で閉ざされた吹雪の世界、そして天上には虎と豹（ひょう）がいて下から来る人を噛み殺し、地下の門には奇怪な姿の土伯（どはく）がいて人を追い回す、と。

第四段～九段では、そして戻るべきこの世は、高い立派な建物と美しい庭園、贅（ぜい）を凝（こ）らした部屋には豪華な食事と美女たち、そして音楽と舞踊と楽しい遊戯（ゆうぎ）という、この世の快樂が満ちていることが歌われる。

魂の向かう先の苦痛、こちら側の世界の快樂という歌い方は、童謡「ほたるこい」の「あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ」と共通するものです。

（牧角「詩経・楚辞」二二六頁）

以下に第二段の前半を示す。

（第二段）

魂兮归来。

魂よ、帰り来れ。

去君之恆幹、何為四方些。

君の恆幹（こうかん）を去りて何すれぞ四方する。

捨君之樂処、而離彼不祥些。

君の樂処（がく）を捨てて、而してかの不祥に離（か）らんか。

タマシイよ、帰ってこい。

おまえのからだを去って、どうしてどこかに行ってしまったのだ？

おまえの楽しい場所はここなのに、それを棄（す）てて不幸せな目に遭（あ）いたいというのか？

続いて東に向かって（何か儀式をしながら詠うのでしょうか）、

魂兮归来、東方不可以託些。

魂よ、帰り来れ、東方は以て託すべからず。

長人千仞、惟魂是索些。

長人は千仞、ただ魂のみこれ索む。

十日代出、流金鑠石些。

十日代わり出で、金を流し石を鑠かす。

彼皆習之、魂往必釋些。

彼はみなこれに習うも、魂は往かば必ず釋けん。

归来兮不可以託些。

帰り来れ、以て託すべからず。

タマシイよ、帰ってこい、東の方は身を寄せるべきところではない。身の丈千仞（一六〇〇m位？）の巨人がいて、ひとのタマシイばかりを探し求めているだろう。

この世には十の太陽があり、それらが毎日交代で日の出することになるので、残りの九つは東の地にあるから、その熱で金属も流れ鉋物は融けていることであろう。

東方に棲むモノはその世界に慣れているだろうが、タマシイがそこに行けば必ず融けてしまうだろう。

帰ってこい、そこは身を寄せるべきところではない。

古代の楚の地方では、東方に巨人や太陽がいた（と信じていた）わけです。ワクワクしますね。

次いで、今度は南の方に向かって呼びかける。

魂兮归来、南方不可以止些。

魂よ、帰り来れ、南方は以て止まるべからず。

雕題黑齒、得人肉以祀、

題に彫り齒を黒くし、人肉を得て以て祀り、

以其骨為醢些。

その骨を以醢と為す。

蝮蛇蓁蓁、封狐千里些。

蝮蛇蓁蓁として、封狐は千里す。

雄虺九首、往来倏忽、

雄虺九首ありて、往来すること倏忽、

吞人以益其心些。

人を吞みて以てその心を益す。

归来兮不可以久淫些。

帰り来れ、以て久しく淫ぶべからず。

タマシイよ、帰ってこい、南の方は止まるべきところではない。

ひたいに入れ墨を入れ、おはぐろをした蛮人が住んでいて、やつらはニンゲンの肉を得てはこれを礼拝し、骨付きのままでシオカラにして食べているだろう。マムシやヘビがうようよ・もじょもじょといて、巨大なキツネが千里を走り回っているだろう。

九つの頭のあるオスの大蛇が、すばやく行き来しているが、こいつはニンゲンを食べるとその心臓（生命力）が補強されるというやつなのだ。帰ってこい、そこは長くふらふらしているべきところではない。

●雕題：はひたいに彫りモノ（タトウ）をする。●黒齒：齒を黒く染める、いわゆる、おはぐろ風習。●醢（かい）：は碎いてぐちゃぐちゃにして塩漬けにして腐らせた食べ物、要するにシオカラ。●蝮蛇：マムシとヘビ、●藁蓐：集まってさかんなること。●封狐：大きなキツネ。●雄虺：おすの大蛇。●倏忽：たちまちすばやく。

南の方は、さらにコワイですね。おはぐろ人肉シオカラ族、マムシ、九頭大蛇、巨大キツネ…。ワクワク。ドキドキ。ああ西や北もコワイんだろうなあ。

そうなんです、タマシイへの「帰ってこい」という呼びかけは、西と北（第二段後半）、さらに天上と地下（第三段）にもなされ、それぞれの場所で遭遇するおそろしいドウブツ、魔物、自然現象が列挙されていて読んでいるだけで冒険者魂がワクワクしてくる…のです。

（漢文日録 26: 5: 23: ネット）

**招魂祭**

(writ. より抜粋)

招魂祭しやうこんのまつりは日本の陰陽道・中国の道教で行われる祭祀・呪術のひとつ。宮中でも行われた。近代に新しく招魂社・靖国神社などで死者に対して始められた「招魂祭」しやうこんさいについては靖国神社参照。

**概略**

日本の陰陽道では衰弱している生きた人間の活性化のため、中国の道教では死者の靈魂の離散防止のためとして行われる。神道の生者・死者の双方に対する鎮魂祭とは別のものである。

**中国の道教**

道教では死者に対しても招魂祭を行う。但し、復活の儀式ではない。たとえば紀元前の戦国時代の『楚辞』には宋玉の「招魂篇」では罪なく奸人に追われて死んだ屈原を偲び、その魂の離散を恐れ、呼び戻す為に行われている。『楚辞』九歌の「国殇」こくしやうには「身既に死して神以て靈・魂魄毅として鬼雄となる」とある。現在でも死んでから一〜三年後に常設の「神主」しんしゅ（儒教でも用いる。仏教の位牌にあたるもの。）に名前を記し、新たな先祖として祀る。すると、一種の鬼でありつつ、子孫の幸福・安全を守る先祖となるとされる。

**螢招魂歌**

(墨場必携・漢文、ネット)

捕螢歌 (ほたるがりの歌) 民間伝承

亮火虫 夜々紅 天上去 雷打你

下地来 火烧你 快来 快来 我保你

(訳) 螢、螢、夜な夜なあかい。天に上りや、雷さまがうつぞ。

地に下りや、火がやくぞ。早く来い、早く来い、お前を大事にしてやるぞ。

捕螢歌 (ほたるがりの歌) 民間伝承 江蘇省杭州

火燄虫 的的飛 飛上来 飛下去

(訳) 螢、螢、ぴかりぴかりととんで。飛んでは上り、飛んでは下る。

捕螢歌 (ほたるがりの歌) 民間伝承 江蘇省

游火虫 夜々紅

飛到西 飛到東 好像一盞小燈籠来

(訳) 螢、螢、夜な夜なあかい。

西に飛んで、東に飛んで、ちいぢやな提灯そっくりだ。

## 「長恨歌」より抜粋

白居易

夕殿螢飛思悄然

夕殿螢飛んで 思い悄然たり

孤燈挑盡未成眠

孤燈挑げ尽くして 未だ眠りを成さず

遲遲鐘鼓初長夜

遅遅たる鐘鼓 初めて長き夜

耿耿星河欲曙天

耿耿たる星河 曙けんと欲する天

鴛鴦瓦冷霜華重

鴛鴦の瓦冷ややかにして霜華重く

翡翠衾寒誰与共

翡翠の衾寒くして誰と共にせん

悠悠生死別經年

悠悠たる生死 別れて年を経たり

魂魄不曾來入夢

魂魄曾つて来たりて夢にも入らず

## (訳)

夜の宮殿に螢が一つ二つ飛ぶのを見ては、(玄宗皇帝は)もの思いにとらわれる。ぼつんと一つ置かれた燈火の芯をかきたて尽くしても、眠れない。

時刻を告げる鐘や太鼓の音も、じれったいほど間遠く、秋の夜長を初めて思い知らされる。やがて天の川が明けようとする空にしらじらと輝く。

皮肉にもおしどりの形をした屋根の瓦は冷たく、霜の花が重く降り、翡翠の縫い取りをしたかけぶとんは寒く、共に寝る人はいない。

生死の境を異にして二人は遠くへだたり、別れてから久しく年が過ぎたけれども、楊貴妃の魂は夢の中にさえ一度も訪れてこない。

(白楽天一〇〇選 九一頁)

## 「源氏物語 四一帖「幻」」にて引用

(螢の飛ぶ姿に光源氏が故人(紫の上)を偲ぶ)

螢の、いと、多う飛びかふも、「夕殿に螢とんで」と、例の、ふるごとも、かゝ

る筋にのみ、口馴れ給へり。

夜を知る螢を見てもかなしきは時ぞともなき思ひなりけり

「ほたるこい」

ほ、ほ、ほたるこい。

あっちの水は苦しいぞ。

こっちの水は甘いぞ。

ほ、ほ、ほたるこい。

夏の夕べの清流に光を点滅させる蛍、その姿のはかなさと懐かしさは、人に死者の魂を連想させる。人の肉体からあくがれ出る魂を、日本の古典は蛍に譬えることが多くあった。この童歌に歌われる蛍もまた死者の魂を、そしてこの歌はそれを呼び招く招魂を歌ったものであった可能性がある。

（牧角「詩経・楚辞」二一五頁）

## 万葉集での「螢」

万葉集の螢は長歌にわずか一首のみ、しかも短いという比喩に用いられているだけである。